

◎ 2017年度参加学生の声



[実習先]
株式会社キャッチアップ

社会学部
社会学科
2年生(参加時)

鈴木 夢衣さん

自分たちが伝えなければならないことを自分に落とし込む

インターンシップではどんな活動を?

私がインターンシップに行かせていただいた企業は、株式会社キャッチアップ(賃貸のエリツ FC)です。こちらのインターンシップ先は、不動産業だけではなく地域活性化にも力を入れておられ、地域活性化のため、「茨木地域情報」を立ち上げられました。「茨木地域情報」とは、「茨木の良さを多くの方に知っていただきたい!」「茨木を元気にしたい!」をモットーに、茨木市にあるお店のおすすめ商品や特徴をホームページやSNSに掲載させていただき、地域の方・市外の方に発信していくという取り組みです。インターンシップの内容は、茨木市内を自分達の足で歩き、アポなしでお店に入り、「茨木地域情報」にお店の情報を掲載させていただけないと交渉することです。交渉が成立すれば、お店の方に取材をさせていただいたり、お店の内装・外装の雰囲気などのお写真を撮らせていただいたりしました。

インターンシップを通じてどんな発見や気づきがあった?

私は、今まで人と話すということに対してすごく緊張していました。そのため、お店で「茨木地域情報」について説明する時、頭に入れたはずの情報が口から出てこず、言葉に詰まってしまいました。さらに、掲載するのは無料であるという大切なメリットも、お店側から聞かれるまで忘れていました。まず、どうすればお店側に自分達の伝えたいことが伝えられるかをチーム3人で話し合いました。緊張してしまう・具体的に話せないという問題は、シミュレーションをたくさん行なうことがいいのではないかと結論が出、事務所でとにかく話す練習をしました。さらに、より効果的にお店側に伝えるためにはどうすればいいかを話し合い、ホームページやSNSのページを印刷し、お店側に具体的に現物を見せられる資料を作りました。結果、練習したことでの自分達が伝えなければならないことが飛び出るようになりました。また、資料があることで、お店側も「こんな風に載るんやね!ぜひやってほしい」と具体的に「茨木地域情報」を理解していただけ、取材できるお店が増えました。そして、インターン生全員が高い確率で交渉を成立させることができるようになりました。



[実習先]
伊丹市立図書館
「ことば蔵」

心理学部
心理学科
1年(参加時)

露無 佳世さん

参加者目線で考えることの大切さ

インターンシップではどんな活動を?

今回私は、伊丹市にある伊丹市立図書館「ことば蔵」でインターンシップをさせていただきました。私がインターンシップに参加したきっかけは、静かなイメージのある図書館でほぼ毎日イベントをしていることに驚き、興味をもったからです。図書館でどのようなイベントを行っているのかを知り、そして、自分もイベントの運営に携わりたいと思いました。また、自分たちでツアーを企画・運営するとき、やってみたいと思ったからです。ツアーは、私たち追手門学院大学の一期生にあたる宮本輝さんの小説「泥の河」の舞台をめぐり、ツアー参加者に宮本輝作品をより一層好きになってもらうことを目的としたものです。宮本輝さんは現在も伊丹市に在住しているため、伊丹市立図書館と追手門学院大学の共催で開催することになりました。

インターンシップを通じてどんな発見や気づきがあった?

インターンシップ生同士で行った議論の中で代表的なトピックの一つがツアー当日の資料の使い方です。資料が多ければ多いほど持ち運ぶことが大変になります。しかし、少なすぎても物足りなさが出来てしまいます。そこで、パネルは各場所に基本一枚とし、他に見せられなかったものはプレゼントにしたり、休憩時間に自由に見ることができますようにしたりしました。議論を通じて理解したことは、主に二つあります。一つ目は資料が多いことは大切であるということです。資料が多ければ、自分の知識や引き出しが多くなり、参加者の方からの質問や疑問に素早く答えられるからです。二つ目は相手の立場を考えることです。資料を調べ、配布した所までは良かったのですが、配布資料に出品の記載がありませんでした。持ち帰っていただけない資料だったので、参加者の方から自分でもう1度見たいと思っても探しようがないと言わってしまいました。そこから、何回も参加者目線で考えることが大切だと感じました。